



**愛妻**  
**寝取られ生配信**

**R18**  
ADULT ONLY  
成人向け作品につき  
18歳未満閲覧禁止

僕と虹花との付き合いは中学生のころまで遡る。

中学の時に同じクラスでひよんなことから会話した僕たちは、その時にハマっていた漫画の話で意気投合。

2人とも一般的な中学生の悪ノリが苦手だったのもあり、2人だけで遊ぶようになった。

しかし、高校生になって疎遠になる。

また一人に戻った僕は、そのとき初めて気づくのである。

僕は虹花が好きだったということに。

その後、大学のサークルで再会。

後悔を晴らすように想いを告白すると、

虹花も同じ気持ちだったと知り、僕たちは付き合い始めた。

そして、数年の時を経て結婚した。

虹花は僕にもつたいないほど良い妻だ。  
そう思いながら彼女を見ていた。

「…何？何かついてる？」

ドキドキ♡

彼女は動揺する。  
急に顔をまじまじと見つめられて、  
バツが悪そうだ。



「いや、今日も可愛いなっで」  
「はいはい」

ドキドキ♡

そっけなく返事する彼女。  
いつもこうして流されるが、その耳が赤くなっているのは知っている。



彼女とは長い付き合いだ。互いを理解しながら愛しあえる関係。そんな関係性を、いつか進めなければならぬ。それは多分、今日だ。

「…あの、さ」僕は口を開ける。

「うん」彼女は見透かしたように相槌を打つ。



「僕は君のことを一生大切にしたい。  
そのことは信じてもらえてるはずだ。

結婚式で君を幸せにすると誓った。だから——」

ドキドキ♡

あーっ  
っ

と言おうとした矢先、口を人差し指で止められる。  
そして彼女が代わりに口を開く。

「ごめん、急に止めちゃって。でも、これは私が言いたいの。だってあの時は君が告白してくれたから。今度は私の番。ね、よく聞いて?」

ドキドキ♡

彼女は僕の手をぎゅっと握る。深く息を吐き、そして息を吸った。「私と一緒にになって、くれませんか?」



いつも2人で寝るベッドが、今は狭く感じる。

言葉を重ねてきた僕たちは今日、手と口を重ねる。

それからお互いの目と心を合わせる。

2人分の心音が聞こえる。

「うん……。もう、いいよ」

虹花の声を合図に、僕は挿入した。

虹花の膣壁は僕を難なく受け入れる。

「んっ…ふうっ…」虹花は悩ましそうな声を上げる。

んっ  
んっ  
んっ

んっ  
んっ  
んっ



「あっ、ごめん。痛かった？」

「ううん。大丈夫」虹花は安堵の表情を見せていた。



はい

「じゃあ、動くね」僕が声をかけると、虹花は頷いた。

二人きりの部屋に、ぎこちない音が響く。  
クチュツ、クチュユ……。慣れない水音。

お互い探り合うように腰を動かす。  
ふと視線が合う。僕たちは幸せを分かち合っていた。

は は  
♡♡

ぬちゅ♡

ぬちゅ♡

刹那、射精感が高まった。

「んあ…っ。ごめん、もう」僕は虹花の手を握る。

はは  
っっ

んあ  
っ

「いいよ、来て…？」虹花は手を握り返す。



僕はたどたどしく腰振りを早める。  
一突き毎に虹花は息を漏らす。

鼓動が速まる。緊張が高まる。

「虹花——っ！」

は は  
♡ ♡

ははは  
ははは

ははは  
ははは  
ははは  
ははは

一番奥で僕は射精した。ドクッ、ドクッという音がする。  
満たされる多幸福感。

虹花もまた、幸せそうな顔をして、僕のことを受け入れていた。

は は  
♡ ♡

はぁ  
あぁ  
あぁ

ドクッ



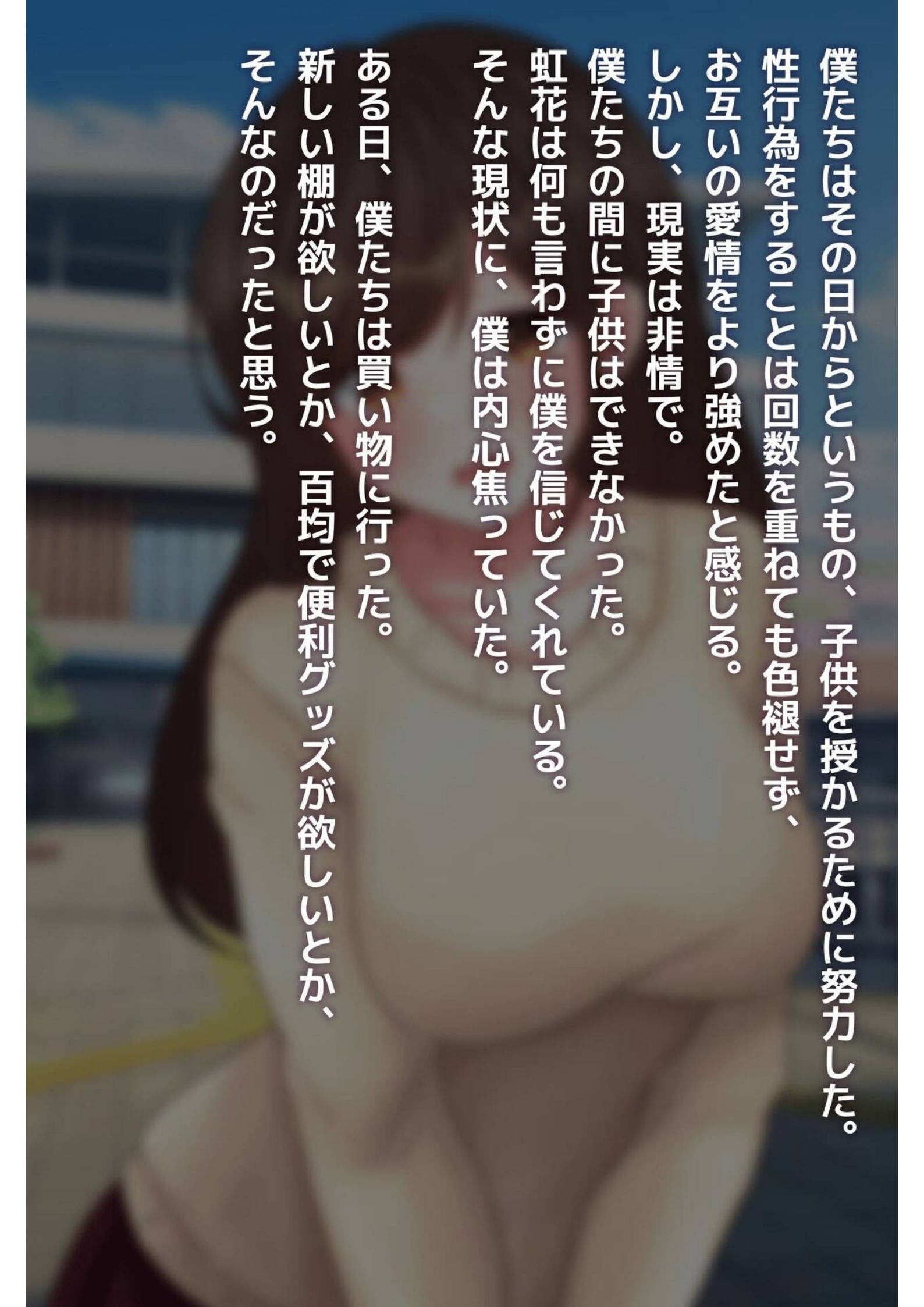
その行為は一瞬のようであったが、  
僕たちはその短い時間で、  
やっと理解しあえたような気がする。

はは  
♡♡

はい

はは...♡

「...好き。大好き、  
だよ？」と虹花が囁く。  
永遠にも思えるような、  
素敵な時間。  
僕たちは暫時その感覚を  
噛み締めていた。



僕たちはその日からというものの、子供を授かるために努力した。性行為をすることは回数を重ねても色褪せず、お互いの愛情をより強めたと感じる。

しかし、現実是非情で。

僕たちの間に子供はできなかった。

虹花は何も言わずに僕を信じてくれている。

そんな現状に、僕は内心焦っていた。

ある日、僕たちは買い物に行った。

新しい棚が欲しいとか、百均で便利グッズが欲しいとか、そんなのだったと思う。

「そういえば、この前見た店が雰囲気良さそうだったよ？」  
と虹花が無邪気に言う。

「へえ。どんな店？」

「えっとねー。ブクマしてるからちよっと見て…。っど、これだ！」  
虹花はスマホの画面を見せてくる。

その時だった。

「Akirrrrrのメンバー向け新着投稿が1件あります」

画面上部に、アプリの通知がポップした。

目を疑った。

「どうしたの?...あっ」

僕の顔を見て、スマホを覗く虹花。

すぐに原因を理解したのか、顔を真っ青にしていた。

あ...っ  
...っ



「あっ、えっと。違うの。ね？ただの興味本位というか。画面越しに見てるだけで、ね！」

慌てる虹花。

しかし、僕の顔色を見て、虹花は何も言わなくなった。

ドクドクドク

僕は口を開いた。

「それは、僕の知っている、あの人でいいんだよね？」

ドクドクドク

あ……

……

「そう、だと思っ」言葉を選んで答える虹花。

AKIRRY、それは一部界限で有名なR18配信者だ。

DMですり寄り寄ってきた女を犯す配信や有料動画で設けているように、その額は想像を絶するほど。

そんな噂を聞いたことがある。

僕が初めてAKIRRYを見た動画は、SNSで流れてきたサンプルだった。そこに写っている女性は、清楚な可愛い人だったと思う。

それが、美しい顔をグチャグチャにして、狂ったように潮を吹きながら、濃厚なキスをして、

AKIRRYを全身でガッチリとホールドして種付けを懇願していた。射精直前で動画は終わってしまったが、

その先は想像に難くない。きっと身も心も、

墮とされてしまったのだろう。

そんな男の有料会員に、虹花が。

ドキドキ♡

あーっ  
っ

「で、でも。一番安いプランだから。一回も会ったことないし、メッセージなんてしてないからー!」

「……だよ」

「え？」虹花が訊き返す。

「一回だけなら、いいよ」

ドキドキ♡

そう言いながら自分のスマホを手に取り、画面を見せる。  
そこには僕にも来ていた新着投稿の通知があった。



あの日、僕たちはあの男にメッセージを送った。

「妻を抱いてくれませんか」という趣旨の文章と、虹花の裸の写真。

それからトントン拍子で話が進んだ。

そして、寝取らせの約束の日が、ついに訪れた。

今日だけ虹花が他の男のモノになる。



「今日だけだよ。夜には帰ってきてきてね？」心配になった僕は確認する。  
「んもー、あなたが言い始めたんでしょ？」  
「ごめんね、僕がこんなのが好きから…」

ドキドキ♡

今日するのはただのお遊びだから、大丈夫。  
理性ではそうわかっているけど、心の内奥ではどこか胸が痛んだ。

「ううん、むしろ君のために何かできて嬉しいから。安心して？」  
「でもー」

ドキドキ♡

あーっ

っ

「安心して。私はあなたが一番だから。  
明日は休みだから、帰ってきたら…ね？」

虹花は照れながら言う。

そうだ、僕は夫だ。妻を信じるのが務めだ。

だから今日は、信頼して遊んでもらおう。

僕はそう確信して、虹花が家を発つのを見送った。



その日の夜、虹花は帰ってこなかった。

次の日の朝も、昼も。家には僕一人だった。

心配で何度も連絡したが、音沙汰はなかった。

結局帰ってきたのは、翌日の夜だった。

僕は帰ってきた虹花に駆け寄ったが、

虹花は「大丈夫、大丈夫だから！」と

うわ言のように繰り返すだけだった。

僕はその疲弊しきった顔に、何の言葉もかけることができなかった。

僕は右往左往することしかできなかった。

翌朝になると、虹花はいつも通りだった。

しかし、スマホを見ると虹花から動画が送られていた。

それは虹花が犯されている最中の動画だった。

気が動転する僕に「じゃあ、今日の夜。楽しみにしてね」と耳打ちする虹花。僕はこれが夢にしか思えなかった。



その日の仕事は身が入らなかった。

帰るやいなや、僕は虹花にお願いをした。

虹花は何も言わずに、寝室を指さした。

僕は指示通りにベッドで待っていると、虹花が入ってきた。

「あはは…。動画は、見たんだよね…。」

「って、その様子だと聞くまでもないかな？」

虹花が意地悪に笑う。

僕はもう興奮が隠しきれなかった。

「待ってね、今脱がしてあげるから」と言いつつ、僕の股間に何のためらいもなく手を付ける。

すぐに怒張したチンポが姿を現した。

ぽろん



「わあ、もうこんなに…」驚く虹花。

「私が他の人に犯されてるのに、興奮しちゃったんだ？」  
その声には嘲笑が混ざっていた。

「じゃあ、動画見ながら報告してあげな」

あーっ

っ

あーっ

はっ  
はっ



「初対面の印象は…なんか、好青年っていうか。モテそうな男の人。清潔感もあるし、ちよつと拍子抜けって感じだったな。」

でもそれは私を騙すための罠だったんだと思う。

気が緩んじやって、カメラの前で思わず色々話しちゃったの。

私の名前とか、寝取られに同意することとか。

それから、君との妊活の話とか。

最初は普通に聞いてた彼も、いつのまにか横に座って、

肩をぐいって引き寄せてきて。太ももをスリスリしてただけの手が、

いつの間にか股の間にまで伸びてきていて。

私の身体もキュンキュンしちゃって…。

彼が強引にキスしてきた時には、

もう身体が彼を求めちゃってた。

そしたら、彼も興奮してたみたいで…。

その…おちんちんを、私に見せつけてきたの。

私はもう逆らえなくて。おちんちんをじーって見てるだけで、

何も考えられなくなってる。

そしたら彼が、私をグイって持ち上げて…」



「君のが悪いってわけじゃないんだけど…」

そう言いながら僕のちんぽを見る虹花は、不満げな顔をする。

ドキドキ

「彼のおちんちんは雌を屈服させるための男性器。亀頭の大きさをからカリの高さまで、おまんこに響いちゃうの」



「ひゅん♡♡♡♡♡いっ♡♡ああっ、あ、あああ♡♡♡」  
カメラの前だと言っのに、品性のない喘ぎ声を上げる虹花。

ちゅわん♡  
ちゅわん♡

あーあ

「あーあ、こんなにも下品な声出して…。」

「ふふっ、でも彼の前じゃあ女の子はみんなこうなっちゃうよね」

男は快楽に狂う虹花を相手に、当然のように抽送を繰り返す。

あーん♡  
あーん♡





「ひびっ、うううううう♡♡あ♡あっ♡」  
身をよじらせようとした虹花を男はガツシリホールドして離さない。

ちゅっ♡  
ちゅっ♡

あ、あ、あ

あ♡

「ね？快楽を逃がそうとしたって無駄なの。彼にはぜっくんぶバレてる。  
私、こんなに感じやすんだって初めて知っちゃった」

そう言う虹花は顔を紅潮させながら、僕の亀頭をこする。  
虹花の手を全面に使って刺激を送り込んでくる。

「な、虹花…っ。それ、ヤバ…っ」  
「あ、ごめん！」思わず漏れた声に虹花は動揺しつつ謝る。

ドキドキ



「あ♥またっ♥♥ひ♥ん♥ん♥ん♥い♥く♥っ♥イ♥く♥っ♥♥」

目の焦点も合わないまま、壊れたようにアクメを繰り返す虹花。  
きつとその膣内は巨根をギュウギュウと締め付けていることだろう。

ぢゅぢゅ  
ははは



「彼は女の子とこんなふう性交尾するの慣れてるから、ね？」

僕の顔を覗き込む虹花。

きつと頭の中では、あの男のデカチンと僕のとを比べているのだろう。



その刹那、腰振りが速くなる。

「も、お、しめ、ひんらう♡あはあう、は♡♡  
むり、む、無理、イ♡♡はふっ♡はっ♡はひ♡♡」

ぢゅぽ♡  
ぢゅぽ♡

ぢゅぽ♡

ぢゅぽ♡

「あ、もうそろそろ射精だね。君は……んふっ、聞くまでもないか」

嘲笑の目で僕を見つめる虹花。僕はすっかり限界だった。

「射精したい？したいよね？」と意地悪な顔で尋ねる虹花。僕は頷く。  
「あ、ッああああ♡♡あっ、あ、お、ひっ♡♡あ、ッひひ♡♡いっ♡♡」

ぢぢぢ  
ぢぢぢ

ドキ ドキ

はぁ  
あぁ

あぁ  
あぁ

はぁ  
あぁ

愛液でグチヨグチヨになった肉体が打ち合う音。  
ラストスパートに合わせて虹花のシゴク手も速くなる。



「あああああ♡♡♡」男は虹花の一番奥で射精した。



虹花は全身をビクビクッ、と震わせて口をパクパクとさせている。目を回して快楽によがっている虹花は、とっくに雌だった。

僕は歯を食い縛り、射精をしようとする。

しかし、虹花の寸止めのせいで、僕は射精できなかつた

「あー……ごめんね？」とバツが悪そうに言う虹花。

突然の出来事に呆然としている僕を前に、言葉を続ける。

あ  
っ  
っ

っ



「実は、さ。また今度会うことになったんだけど……」  
「えっ！？ダメだよ、そんなの。もう会わないで！」僕は焦って止める。

「あははっ……。それは無理かな。だって、ね？」  
射精を妨げられた僕のチンポを困った顔で見る虹花。

ドクドク



「んー…。なんで言えばいいんだろう。普通の男の人って、女の子に寸止めされても、その子を組み伏せたり命令したりして射精させるものなんだよ」**虹花は冷ややかな目で話す。**

あーっ  
っ

トカ  
トカ  
トカ

「でも、君は違ったよね？おちんちんシコシコ止められても、何も言わずにジツとしてるだけ。女の子には逆らえない。そういう男の人、なんで言うか知ってる？」



冷や汗をかく僕に近寄り、耳元で囁く。

「マジ、って言うんだよ」

その時、僕の亀頭に虹花の太ももが触れた。

その小さい刺激で、その囁き声の罵倒で、僕は射精をしてしまった。



その日から僕は虹花様に逆らえなくなつた。

貞操帯を着けられて射精を管理されてしまい、時おりそれを弄ばれる。夜は<sub>ニ</sub>ご主人様<sub>ニ</sub>の交尾がいかにかに気持ちよくて、

<sub>ニ</sub>マゾオス<sub>ニ</sub>の腰へコがいかにかにつまらないかを教え込まれる。全ては<sub>ニ</sub>ご主人様<sub>ニ</sub>のために、と。

射精を禁止される日々の中で、僕は狂いそうになっていた。

そして今日、<sub>ニ</sub>ご主人様<sub>ニ</sub>と会う日。それは虹花の危険日であつた。

裸で待機させられている僕の前に、

<sub>ニ</sub>ご主人様<sub>ニ</sub>と、その迎えに行っていた虹花様が帰ってきた。

僕は命令通りに三つ指をついて、<sub>ニ</sub>ご主人様<sub>ニ</sub>たちを出迎えた。

「じゃあ、言ってる？」

カメラをセットした虹花はご主人様に尻を突き出しながら、僕に指図する。

は  
は  
♡♡

ドキ  
ドキ♡

「は、はい」僕は練習したセリフを喋り始める。

「私はオナニーで射精するためだけに、妻を他の男に差し出して、生ハメしてもらいます…っ。」

妻は危険日なので、中で射精したら絶対に孕ませることができません。そしてこのビデオはご主人様が販売しても構いません。それから…」

はー  
はー

はい

ドキ  
ドキ

ぬちゅ♡

「もー、長いって。早く早く♡」

雌をハメる準備ができているデカチンに虹花様は尻を擦り付ける。



「あっ、あ、お、お、ひっ♡♡おいらっ♡♡  
オナニー緩めん、なあっ♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
マジお♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡」

はは  
はは

おんおん  
おんおん  
おんおん

おんおん  
おんおん  
おんおん

おんおん

おんおん  
おんおん

すみませんすみませんっ、と僕は謝りながら自慰行為をする。  
僕は雄として完全に負けていた。



きっと僕のチンポを虹花様に挿入しても、  
スカスカで子宮にさえ届かないだろう。

はは  
はは

ちゅぽぽ  
ちゅぽぽ

ぽんぽん  
ぽんぽん

「あ、あのっ、射精させてくださいっ」僕は懇願する。  
ご主人様はニヤツと笑うと、その腰振りにより一層力を入れた。



「……ッおおおあっあ♡♡」濃い精液が膣口から溢れ出す。

僕はティツシユに薄いザーメンを吐精する。

その差は一目瞭然であった。

ミッパッ

フッ〜

フッ〜

フッ〜

フッ〜

ミッパッ

ッ

「んぎッ♡♡おっ♡♡おお♡♡んあああ♡♡ん♡♡ん♡♡んううう♡♡」  
中出しされた快樂が脳をショートさせてしまったのが、  
虹花様は言葉にならない声を漏らしたまま、腰を震わせていた。



僕がティッシュを捨て、潮と精液で汚れた床を掃除し終えたころには、虹花様はなんとか意識を取り戻していた。

ご主人様は次の用事があるから、と早々に出ていってしまった。

「あはっ…！♡中に、出され…ちやった…あ♡」

余韻に浸るその目に、僕はもう映っていなかった。

部屋には一生取れないような、雄と雌の臭いが残っていた。